

仕事をしない間の効果的な過ごし方

ー我が社、我が街から失業者を一名も出さないために⑩ー

開倫塾

塾長 林 明夫

1. はじめに

「自分の会社から一名も失業者を出さないことと、自社で毎年一名以上新卒を採用しつづけることが、会社の経営者ができる現代日本社会への最大の社会貢献活動である。」「我が街から一人も失業者を出さないことが、職業政治家や産業政策立案者である行政マン、その街の財界や若手経営者グループ等のトップの考えるべき最優先事項である。」と、昨年来この「みにむ」で繰り返し主張させて頂いたのに、「失業中(つまり仕事をしない間)の過ごし方」を書くとは何事ぞとの批判があるかも知れない。

ただ、私自身は、余り熱心とはいえないまでも、足利高校を卒業後に慶應義塾大学の法学部法律学科で法学を勉強した後、大学の研究室で8年余り弁護士を目指し司法試験の勉強をしたことがあるので、少しは「法的なものの考え方」をすることがある。その最たるものは、「常に最悪の状況を予想して対策をたてておくこと」と「想定されるあらゆる場合に分けてものごとを考えること」である。

故に、「我が街から失業者を一名も出さないために」とのテーマで雇用対策を考えるに際しても、「万が一失業したとき」はどのように過ごすことが最も効果的か、を考えざるを得ない。そこで、失業中の心得を述べさせて頂く。誰もが「一寸先は闇」なのが現代である。幸いにも仕事をお持ちの方も、万が一に備えての「武士のたしなみ」として是非考えるヒントにして頂きたい。

2. 充実した毎日を過ごすことにより実力アップをはかろう！

①**基礎姿勢** 先日、失業率24%余りという「失業の先進国」スペインを訪問した。驚いたことに、24%も失業者がいるという統計数字があるにもかかわらず、人々は皆明るく、楽しく元気そうに過ごしていた。職業安定所も非常に明るい雰囲気であった。なぜなのか。理由は、どんな時にでも楽天的なスペイン人気質によるものが大きいと思われる。スペインの人々は、子どもを育てる時には、決して甘やかすはしないが、よい点があるとどんどんほめ、自信をつけさせることが上手のようだ。その結果、子どもが大きくなりたまたま失業しても、「僕はこんなにも素晴らしい才能を持っている。たまたま今仕事をしていないのも、僕にふさわしい職場や仕事がないからだ。」と考え、あくまでも明るい。

過去をくやんだり、自分を責めたり、他人をうらんだりしても終わったことは元には戻らないのだから仕方がないと考えて、スペインの人々を見習って「明るく、楽しく、元気よく」、たとえ失業中でも過ごすことを基本姿勢にすべきかと思う。

②**心と身体のリフレッシュの方法** せっかくの貴重なリフレッシュ期間であるから、誰に遠慮することもない。気の済むまでリフレッシュする方がよい。

旅行は、リフレッシュに最も効果的だ。一人でもいいし、友だちとでもいい。思い切って1ヵ月でも2ヵ月でも、日本国内のみならず海外にも出かけてみると視野が一気に広がる。

日帰り温泉ドライブ 栃木・群馬・福島・長野の4県には、数え切れないほど日帰りで入浴できる温泉がある。一人でも、気の合った仲間とでもいいから、毎日のように温泉に入りに行くと、心も膚もスベスベになり、ピカピカに光り輝き出すこと間違いない。(タオルとお弁当さえ持っていけば、1～2時間車で走れば500円から1200円で最高の温泉に入れるのが、この地区の特色である。)地の利を生かすこと。

<U>趣味・スポーツ・習い事</U> 時間がなくて今までできなかったことに、どんどん取り組んで欲しい。徹底して励めるのは、この貴重な失業期間しかないと考え、短期間のうちに、他人を教えるまでに、いくつか好きな分野でなりたい。時間がなくて今までピアノがひけなかった人は、毎日5時間でも10時間でもピアノに向かい、次々と演奏できる曲目を増やしていくとよい。ショパンやバッハの曲にも真正面から取り組むとよい。日本舞踊が好きなら、朝5時から起きて、正午過ぎまで、毎日6時間は踊りの稽古を半年もすると、人前で踊っても、他人に感動を与えるまでになる。スペイン語も毎日10時間も勉強すれば、半年で新聞がうっすらわかるようになること、うけあいだ。

- ③身体を正常に近い状態にすること 太りすぎであれば適正体重まで落とすべく、入院をしてでもダイエットに励むとよい。どうしてもという人は鈴木その子女史の「トキノ」をおすすめする。病気があれば、たじろがず専門医を訪問。本格的な治療が受けられるのも、時間のある失業中が有利だ。離職に際し、少しノイローゼ気味なら、精神科も訪問するとよい。

- ④職業上の技能を身につけること 以上のように、気のすむまでリフレッシュし、心や体が健やかになったら、やりたい人は、職業上の技能を飛躍的に高めるための勉強をスタートすべきだ。どのような職業であれ、日本国内はもとより、世界に師匠を求め、直接指導を受けられるようルートづくりに全力を傾けるべきだ。

同じ期間勉強をしても、ある人はなかなか力がつかず、ある人は日本でもトップレベルまでいくのはなぜか。ついた師匠や指導者がよかったかどうかだけの差である。そうであるなら、最高の師を求めてしかるべきである。学ぶべき場所も大切だ。

- ⑤では、今までの職種ではいくら努力しても報われないと判断し、新しい職種に進もうと決意した人はどうしたらよいのか。ジューシーな業種を探し当てることが何より大切である。しぼれば、いやしぼらなくても、おいしい果汁がしたたり落ちてくるような、ジューシーな業種とは何かを必死になって探すこと。新聞広告の面積、チラシの量、NTTのハローページの広告の面積、求人チラシや求人雑誌の量や面積で、ある程度ジューシーな業績は判る。多少ウサンクサイものでも、法律や社会正義に反しないもので、なおかつ需要の大きくなりかけているものに目を向けること。「安全」「健康」「美しくなること」「スピード」「少子化」「高齢化」がキーワードかもしれない。

＊日本社会の未来を予測しながら、これからはやる業態を考えるのには、アメリカに行き、日本にないはやっている仕事を捜し、熱心に日本でも同じようなことに取り組んでいる会社を捜すのが最も確実だ。

⑥<U>どの会社や団体に就職したらよいのか</U> 具体的な就職先を探すことが次の作業となる。

採用を手びかえているところが多いが、そんな時はパートやアルバイトでひとまず入り込み、正社員をはるかに上回る10以上の具体的な改善策を、観察(問題点の発見)、分析(原因の推定)、判断(「緊急対策」と「制度改革策」の策走)の方法で毎月書きためて、社長に直接手渡すことが正社員になる最も近道な方法だ。社員の賃金が世界最高水準までいっている日本企業のトップが求めるのは、高い賃金に値する仕事ができる人材であるからだ。毎月10本以上改善策を正式な形で出されて正社員として採用しない経営者は、一人もいないと考える。

⑦<U>誰よりも早く出社し、誰よりも遅く退社すること</U>が、入社して早急に出世する唯一の心構えである。仕事がないと自分で仕事を捜し.形にしてみんなのお役に立つこと。出来れば、新たな売り上げを上げ、そのための経費をあまり使うことなく利益を出すことに直接貢献すること。＊早く出世をし、待遇を早急に向上させたいければ、余り大きな会社や、古くからやっている会社に入らず、今は小さくても伸びざかりの会社に入るといくらでも仕事があり、あっという間に経営幹部にまでのぼりつめることができる。「小さくてもキラリと光る、その街の宝物のような会社や技術者」を捜し当て、そこに入り力いっぱい、思いきり仕事をしてみると面白い。

⑧1回しかない貴重な一生であるから余り妥協した生き方はしなくてよいと思う。自分が全身全霊をかけて打ち込める仕事や職場に出会うまで、あせることなく充実した毎日を積み重ね、めったにない貴重な失業期間を有効に使って欲しい。

3. おわりに

せっかく一所懸命勉強してきても仕事がない、つまり失業したら、他に養ってくれる人がいない限り生活できない。たまたま日本は戦後50年間経済の伸びが激しかったために失業率が低かったが、これからは他の先進国なみに「10%以上」の失業率が予想される。今回までの10回のシリーズで、その対応策を私なりに述べさせて頂いたが、ぜひこの「みにむ」の読者の皆様も自分のこととして、失業問題に取り組んで頂きたい。

最後に、本年3月に広島市で開かれた「経済同友会」の全国セミナーでの私の発言を紹介させて頂く。

「ドイツの失業率が11%内外になったことで、ドイツもヨーロッパの各国と同じように、いつでも誰でも失業者になる可能性のある国の一つになってしまったとよく言われています。構造改革をいかにすすめるかということで規制緩和の話が随分でていますが、私は、日本の経済問題の根幹はどこにあるかといえば、最終的には失業問題だと思います。ではどうしたらよいかと言いましたら、我々は一応経済人ということで会社を経営しておりますので、自分達にできることは、自分の会社から失業者を一人も出さないということが一番大事かと思います。それから、自分の会社で毎年一人以上新卒を採用し続けることが大切かと思います。

それからもう少し言うと、自分の街から失業者を一人も出さないためにはどうしたらよいかということを、地域経済の観点から真剣に考えていくことが、いろいろなことを解決する糸口になるのではないかと思います。

アメリカやヨーロッパでは企業の存続のために解雇をしてしまう。そこで出た失業者を社会福祉の対象者とするため高いコストがかかり、そのため増税をするヨーロッパ型の雇用対策がよいのか、パ

ート化や賃下げ・年棒制の導入により人件費を固定費から流動費にしつつ、小さな企業の創業を支援するアメリカ型の雇用対策がよいのか随分と議論がある。ただ、とにかく我々は経営者ですから自分の会社から失業者を出さないためにはどうしたらよいか、更には、毎年毎年今までと同じか、それ以上に新卒を採り続けるために、どのように社内で新規事業をおこしたり、子会社をつくり続けていけばよいのか。こういうことも基本にして考えないと、せっかくここ広島に1000名近くの日本の経営者を代表する方々が集まっても、いい話を聞いただけで帰ってしまったら、余りにも今働いている社員に、申し訳ないような気がします。是非そういうことも含めて皆様には、どうしたらよいのかということを考えていただければありがたいと思います。」

*「日本の自己改革」新世紀経済人の責務・第9回全国経済同友会セミナーの記録、1996年10月1日、広島経済同友会刊行87～89ページより引用。

＊以上は、1996年3月14日・15日に広島市で開かれた「経済同友会」の全国セミナー・第一分科会「日本経済の構造改革をいかに進めるか」での私のフロアーからの発言の一部である。「21世紀の活力ある企業経営を目指して」との副題のある分科会であるにもかかわらず「失業問題」が語られなかったのも、あえて発言させていただいたものだ。ご参考まで。</P>

<H4 align="center">▼目次へもどる</H4>